道東地域における望郷と故郷の創造
―北海道中標津町の地域誌『北のふるさと』から―

番　匠　健　一

1．根釧原野と「北のふるさと」の結成

近年、北海道文学の再評価する動きが活発である。岡和田晃の一連の著作[1]に加え、道新文化センターのノンフィクション作家養成塾の生徒による連載をまとめたアンソロジー[2]、そして釧路湿原の文学作品を通史的に扱った盛厚三の著作[3]など様々である。北海道を舞台にした文学作品の再評価が進むなかで、北海道内の文芸活動の基盤をささえてきた地域の文学サークルについての研究は、著名なサークルを除いてほとんど進んでいない状況である。道東地域では、『文芸根室』や『文芸別海』、『わたすげ』、『朝霧』など息の長い活動を行っている文芸サークルが多数存在しており、生活記録や創作、詩に加え郷土史研究をすすめる地域の重要な媒体である。本稿では、北海道東部の中標津町で1975年から1985年まで発行されていた地域文芸誌『北のふるさと』（Nos. 1–10）から、道東における文芸サークル運動をになった地域の人々の群像をあきらかにし、道東地域における文芸サークル活動と郷土史の掘り起こしの意義を確認し、本誌のテーマでもある「故郷」を議論することがもつ意味を考察する。

グループ「北のふるさと」は、中標津町を中心に標津町、別海町、羅臼町に住む学校教員、酪農家や農協職員、書店・銭湯・楽器店など個人事業主などがメンバーであり、投稿内容は郷土史、自分史、従軍記、絵画や版画、小説やエッセイなど様々である。死亡や転出（雪印乳業の工場合理化など）により会員数を減らしつつ全体として会員数は15人（No. 1）、28人（No. 2）、29人（No. 3）、31人（No. 4）、34人（No. 5）、36人（No. 6）、38人（No. 7）、38人（No. 8）、38人（No. 9）、41人（No. 10）となっている。また北のふるさと叢書として、加藤公夫『べっかい酪農の四季　農林水産通信員だより』（1981年）、芳賀金六『根釧原野開拓記』（1984年）、霜越幸峯『もう一度我が家へ　ガン闘病記』（1985年）、白野新『私の中の四季』（1985年）、村田吾一『知床流氷記』（1988年）などが出版されている。『北のふるさと』の会員たちが住む地域は、晴れた日には沿岸部から国後（クナシル）島を目視することができ、日本政府が言うところの「北方領土」の対岸に位置し、ロシアが実効支配する地域との実質的に国境地帯であり日本最大の陸上自衛隊矢臼別演習場も設置されている[4]。同地域は、日本帝国時代の樺太や千島列島の居住者が引き揚げ後に多く居住しており、親族に樺太・千島居住経験者がいる人とたびたび出会う。実質的な国境の設定により生まれ育った故郷を訪れること

1）岡和田晃『現代北海道文学論―来るべき「惑星思考（プラネタリティ）」に向けて』藤田印刷エクセレントブックス、2020年；岡和田晃編『北の想像力《北海道文学》と《北海道SF》をめぐる思索の旅』寿郎社、2014年。
2）合田一道・一道塾『小説を旅する北海道』柏艪舎、2022年。
3）盛厚三『釧路湿原の文学史』藤田印刷エクセレントブックス、2022年。
4）番匠健一「北海道総合開発と地域社会」足立芳宏編『農業開発の現代史』京都大学出版会、2022年、239–260頁。

ができない人々の望郷の念は、この雑誌にも色濃く現れている。

『北のふるさと』No. 1の巻頭言では、「日本人の心の再発見」や「心のふるさと」といった言葉が流行し、高度経済成長の結果として残された都会の人口集中と農漁村の過疎という時代背景のなかで、北海道における「ふるさとの文化」とは何かが語られている[5)]。

> わたしたちが生活する根釧原野はいまでこそ、新酪農の建設など大型プロジェクトによる開発がすすめられ、日本の食糧基地化が計画されているが、かってこの地は「鬼さえ住めぬ根釧原野」といわれ、開拓の放棄論さえ公然とささやかれたと聞く。そこには先質(ママ)の血と汗の結晶がようやく開花へ導いたといってもよい。北国の風土と気候は厳しい。その中で生活を繰りかえすものは粗野なところもあるが、人の情や忍耐を心得ている。だからこそ朔北の地といわれるなかで夢を描き、今日も生きている。真っ赤な大きな太陽が荒涼索漠の大地に沈むとき、わたしはむしろ安らぎを感じる。それは、明日またオホーツク海の彼方から登る太陽があるからだ。エメラルドの海にルージュの太陽が調和するところに希望の色を見出すのは、わたしばかりでなかろう。わたしたちは大自然に恵まれたこの地に、生きる喜びを感じる。だが、文化的恩恵にあずかる機会はきわめてすくない。……。グループ「北のふるさと」は歓びを、悲しみを、そして憂いをともに語り合い、綴りあい、そのなかからふるさとを再発見し、人間の生きている証しをたしかめようとする。この小冊子『北のふるさと』が人びとの善意によって成長することをねがって発刊の言葉とする。[6)]

巻頭言の執筆者の吉田宣則（吉田宣、以下（　）内はペンネーム）は、「北のふるさと」創設時は中標津の商工会事務局長を務め、その後は有限会社総合企画を立ち上げている。総合企画は、『中標津町開町四十年記念写真集 ふるさとなかしべつ 不惑の四十歳』（総合企画、1986年）など郷土史資料や玉井裕志『草の葉のそよぎ』（総合企画、1993年）など地域の文芸作品を手掛けつつ、新型コロナウイルスの感染が拡大する2020年まで地域総合情報誌『月刊新根室』を発行し地域密着の情報が行き交う場所を提供し続けてきた。巻頭言にある「放棄論」とは、夏は海霧（ガス）によって日照時間が短く、冬には月の平均気温がマイナス10℃を下回り春先まで地下凍結が続くこの地域で、1930年前後に続いた大冷害の結果として提起された「根釧原野放棄論」であり、酪農への転換の契機にもなった。この時期から北海道では日本帝国圏内外への移民の送り出しが本格化し、道東からは満州や樺太のみならずブラジルや南洋群島へと人々が移住している。この地域は、大正期の北海道第二期拓殖計画によって内陸部への開拓がはじまり、大冷害による離散をへて植民地喪失後に人口吸収の場として再発見される和人側から見た新しい場所でもある。内地の都府県あるいは外地から移住した人々にとって、この地域で経過した時間は望郷の念を喚起すると同時に故郷創造のための時間でもある。文芸活動を通じて「ふるさとを再発見」し、「人間の生きている証」を確かめようという呼びかけには、移住者たちが育った内地の都府県や帰ることができない故郷としての外地への

5）経済成長による都市化を背景にした農村回帰現象は、戦後ドイツにおけるハイマート映画の流行とも重なる点であるが、本稿では「故郷」や「ふるさと」の力学を実質的国境地域という空間性や歴史性から論じる。高橋秀寿『時間／空間の戦後ドイツ史』ミネルヴァ書房、2018年、70-72頁。

6）吉井宣「「北のふるさと」発刊に寄せて」『北のふるさと』No. 1、1975年、6-7頁。

望郷の念と、この地に定着し故郷といえる場所をつくっていく両方が含まれている。

「北のふるさと」の結成は1975年2月3日であり2月8日の初会合には10名ほどが集まり、代表世話人として発行元と事務局を兼ねるアート印刷株式会社の中居順悦、商工会事務局長の吉井宣則、中標津小学校教員の細見浩、国後島留夜別（るやべつ）村で12年間教員を務め当時中標津図書館館長の田村久之助の4人が名をつらねた。中居自身が「センチメンタル」という呼びかけ文には、「ぎしぎしと寒波が原野の夜底を衝いて襲ってきます。この酷烈な自然条件の下で今日も生きている。――ふとそんな自分を自ら愛してみたくなる瞬間（とき）があります。こんな北の果てでの生活。昨日から今日へ、今日から明日へと各自がそれぞれの姿勢を持ちながら時間を刻んでゆきます。歴史とはそのような歩みであり足跡なのでしょう」という北国での暮らしの後に、「生きている証――明日へつなぐもの」という言葉が添えられている。ここには、長い村の歴史が横たわっている内地の町村とは異なり、開拓と定着が近い過去にすすんだ地域の「今日」の時間の延長線上に「明日」をどう描くのかという問いと、和人が到来する以前を含めた地域の過去や、内地と外地からの移住者たちの来歴とどのように関係を取り結ぶのかという問いが潜んでいる。

2．北の「自然」と向き合う―北のふるさと誌上展

『北のふるさと』の表紙は、代表世話人でもある細見浩（No. 1のみ細見ひろし・あさだ正名）が手掛けた道東の風景画によって彩られ、各号では誌上展として道東にゆかりのある作家の絵画・版画・写真などが紹介されている。細見は、旭川出身で教員として中標津に赴任し根室をテーマに木版画の作品を発表し続け、表紙には上武佐（かみむさ）ハリストス正教会や湿原の水芭蕉、雪原の防雪林、野付半島のトドワラなど道東の風景がならぶ。上武佐正ハリストス教会は、ニコライ堂系の教会で九州鍋島藩士族の伊藤繁喜（フィリップ伊藤）が1919年に標津原野武佐教会として建立したものである。伊藤は、根室の和田屯田兵村に入植したのち、標津の薫別（くんべつ）の孵化場で洗礼を受け、その後、大正期に上武佐駅逓取扱人として教会を組織した。大正期に入植者が入り町ができ始めた頃に教会の鐘が鳴り響いたという[7)]。教会内には明治期に帝政ロシアに留学しイコン画を学んだ山下りんの作品がある。

細見は心象的な表現で作品をつくってみたいと思いながら根室の風土にひかれ、「ねむろ」の風景をもとに連作をつづけてきた。『北のふるさと』の誌上展によせた文章では、「牧草地だけが若い緑に変わり、山の近くの木々はまだ冬枯れの姿をさらし、山肌には残雪が見られる春の訪れから始まる根室地方の四季のうつり変わりは、住む者にとってのみ気づき、感動できる喜びである」と述べる。また摩周湖に朝早くから訪れ、鏡のようであった水面が青く変わり摩周湖特有の色になる姿をみて「自然の一部としての自分でしかないような錯覚におそわれる。住んでいる者でなければ味わうことのできないねむろの短い夏の姿である」とも述べている[8)]。道東特有の「自然」の風景の中に身を置き、版画の創作活動を通じて「自然」と一体化することによって、この場所に住む意味を見出している。

No. 2から始まる「北のふるさと誌上展」では、小森亨による「流氷の根室港」「武佐岳雪景」

7）鈴木泰三「武佐の正教会」『北のふるさと』No. 1、1975年、18-20頁、19頁。
8）細見浩「北のふるさと誌上展に寄せて」『北のふるさと』No. 8、1982年、98-99頁。

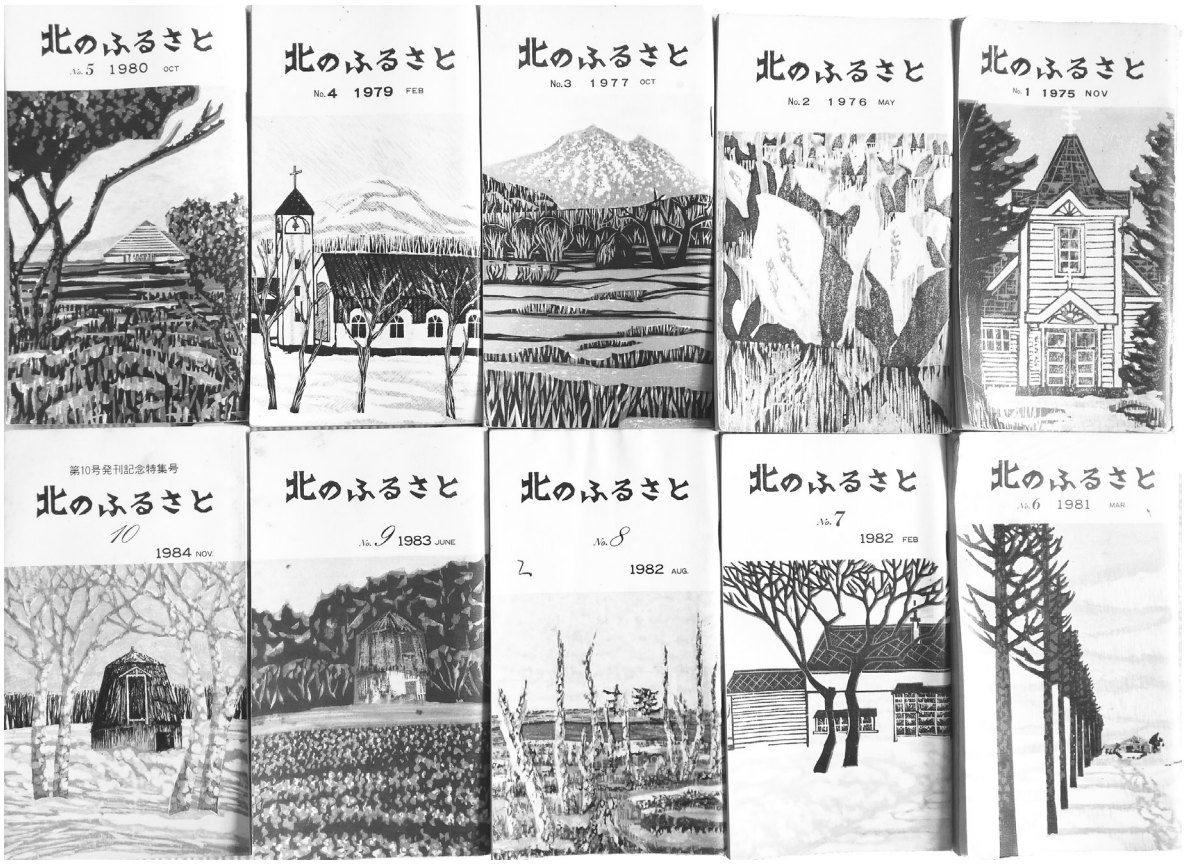

写真１　『北のふるさと』Nos. 1-10

(No. 2)、小樽出身の洋画家・中吉功による「工学部前庭」「農場風景」(No. 3)、中標津出身の清水克美による「西日のトドワラ」「たそがれ（トドワラ）」(No. 4)、択捉島出身の岩田宏一の「無題」(「サイロ」と「ひまわり」) (No. 7、)、細見浩の「山―阿寒」「水辺」(No. 8)、そして小森サダによる「オホーツクの水楢」(No. 9) をはじめとする楢をテーマにした連作が並ぶ。小森は北のふるさと誌上展に「厳寒の風雪に耐え乍ら、飽くまで強く生きぬいて行く水楢の命こそ私達道東人の生きる心意気であるように思われます」という言葉を寄せている。小森の描く楢は「道東人の生きる心意気」という言葉が示す通り、「オホーツクの水楢」に限らず「早春の水楢」や「夕暮れの水楢」も、強風のため幹を大きく横に曲げ、あるいは樹冠を吹き飛ばされながらも生きている姿を描いている。対して清水の描く風景は、野付半島の先で、海面の浸食によって椴松や楢が立ち枯れした「トドワラ」や「ナラワラ」と呼ばれる風景である。野付半島は、2005 年にラムサール条約に登録された道東の観光地として知られた場所である。清水は「「自然」に接する時、そこからは圧倒的な多くの語りかけがあるものだ」という。一枚の絵を描くことは、「ある季節のある場所のある一時のごく限定された条件の中での仕事である。すぐれた芸術家はそこに永遠の生命を感じとり、画面にうたいあげるものだと思う」という言葉を寄せている[9)]。野付半島の海にせり出した突端で風雪に耐え成長し枯れはてた姿は、清水が「永遠の生命」というように人類史とは異なる時間軸を体現している[10)]。

9）清水克美「自然の語りかけ」『北のふるさと』No. 4、1976 年、3 頁。
10）かつてアラン・コルバンは、イギリス、フランスにおける人々の海への感性の歴史的な転換として欲望の対象

岩田宏一が「北のふるさと誌上展」に寄せた文には「自分の住んでいるところの何かを残したい。自分の生きていることを証したい。それが絵になる。標津では船だけを描いた。今ではサイロにつよく引かれる。古いもの程、ひとつひとつのサイロの顔がある。絵を描いたあと必ず満たされないものがある」とある。岩田は、1929年に択捉島藻取(しべとろ)村で生まれ、根室の中学校にあがるまで16年間藻取村で育った。1949年に花咲小学校に勤務したのち、1964年に中標津小学校、根室の幌茂尻小学校、1969年からは標津小学校に勤務した[11]。誌上の経歴欄に「千島列島は全島帰るのが当り前だとしか考えていない」という言葉が添えられている。岩田の父は、茨城県出身で関東大震災で被災し、兄が漁業をやっていた択捉に渡り、終戦時には藻取(しべとろ)村村長を務めていたため公職追放となり、樺太経由で函館に引揚げたのち残りの村民の引揚げを待って1948年に根室の引揚げ者寮におさまった。岩田自身は、根室の中学校に在学中に動員され西春別の陸軍計根別(けいねべつ)飛行場に行ったのち、川湯で終戦を迎えた後、家族の引揚げを根室で一人待ちながら苦学した。青森出身が多かった日雇い労働者とサケマス漁やクジラ漁、千島桜の風景など16歳まで暮らした当時の択捉島の生活を元島民として積極的に発信した[12]。

本節で紹介した細見浩は、版画の創作活動を通じて道東の「自然」の風景と一体化を試み、この場所に住む意味を見出した。小森サダが水楢に見出した「道東人の生きる心意気」や清水克己がトドワラにみた「永遠の生命」は、「自然」がもつ人類史とは異なる長い時間軸に身を置き、距離を置いた形で人間の生きる意味を突き詰めているといえる。野付半島には、幕末に北辺防衛の任についたが番屋で越冬できずに亡くなった会津藩士たちの碑も置かれている。半島の突端にはかつて幻の町キラクがあったとされ海面下の遺構の発見にともない調査が進んでいる。標津から国後島に向かって三日月型に突き出した野付半島は、かつて交易で栄えた人の行き交う場所でもあり、同時に他国からの防衛上の境界でもあった。

3．望郷の声と海の文化―教員たちの千島経験

はじめにで述べたように道東は戦後の人口吸収と食糧増産の地として再発見され、戦災者や引揚げ者や復員兵など急速に人々の流入が進んだ。『北のふるさと』には戦前から居住する人々の従軍経験や外地経験に加え、千島・樺太引揚者による外地経験も多く寄稿された。『北のふるさと』が発刊される時期は、道東の根室市、別海町、標津町、羅臼町には、「北方領土」関係のモニュメントや資料館などが建設される時期でもある。歯舞諸島に近接する根室市の納沙布岬には、千島歯舞諸島居住者連盟が1972年に開設した「望郷の家」で島民の生活資料が展示され、1980年に北方領土問題対策協会が開設した「北方館」で領土問題の歴史的経過が解説されている。1981年には返

としての「前浜の発見」について言及しているが、北海道では道央には海水浴場が点在するが、道東にはほぼないと言ってよい。水産関係を除けば道東では海への接触は消極的であり、釣り人やクルーズ船によって観光客が眼差す「自然」としての要素が強い。（アラン・コルバン『浜辺の誕生』藤原書店、1992年）

11）岩田宏一「四角なガラス板」千島教育回想録刊行会編『千島教育回想録』千島教育回想録刊行会、1977年、552-555頁。

12）「元島民が語る「北方領土」岩田 宏一 択捉島出身」独立行政法人 北方領土問題対策協会ホームページ（https://www.hoppou.go.jp/archives/voices/voice20.html）（最終閲覧日：2022年11月30日）。

還実現のシンボルとして、望郷の岬公園に北方領土返還記念モニュメント「四島（しま）のかけ橋」が建設された。国後島の西に位置する標津町では、1979年に北方領土館が建設され、国後島の集落の暮らしやビザなし交流の様子などが展示されている。別海町でも1979年に北方領土返還要求運動の「正しい理解と世論の高揚」のため別海北方展望台が建設され晴れた日には野付半島の向こうに国後島の島影をのぞむことができる。1982年には四本の柱を「北方四島」に見立てた「叫びの像」が建設され、それぞれ道の駅おだいとうを訪れる人に境界の歴史観を提供している。こうした70年代から80年代のモニュメントや資料館建設の背景には、超党派議員によって進められてきた「北方領土を目で見る運動」があった。現在でも内閣府の事業に加え、根室市では「北方領土を目で見る運動」修学旅行等誘致事業として全国の中・高校生の修学旅行の誘致をすすめ、「北方領土返還要求運動」の次世代の育成をはかっている。『北のふるさと』誌上では、吉村良一が1977年に根室の千島会館と北方領土資料館を訪れ、歯舞諸島の勇留島の模型を見ながら「時折はなつかしみたい願いで造られたものであろう。そんな心情が痛い程感ぜられて暫らく釘づけにされていた」[13]と述べている。

No. 1に掲載された田村久之助「行軍」は、1927年に樺太で翌年には根室・千島で行われた「軍事思想普及宣伝行軍」について書かれたものである。田村は1906年秋田県能代市生まれで、6歳で根室に移住し、1924年に根室商業学校を中退したのち秋田木材の樺太出張所で勤務していた。1926年に召集をうけ旭川の歩兵27連隊に所属し1928年に除隊している。樺太林業は昭和初期の最盛期に向けて盛んな時期であり、樺太西海岸の小能登呂の料理屋での会社の宴会、営林署職員の接待、積取舟の高級船員の接待、請負師や商店からの招待などで樺太各地の料理屋に入り浸っており、行軍中にも声をかけられ冷や汗を流したとある。街々で演習や行軍を行いながら歓迎を受けたことを回想しながら、「此の島も私たちの住んでいた国後も共にソ連領となっている。不自然であり不思議でたまらない。一刻も早く帰って欲しい。望郷やるせない朝夕である」[14]と記している。除隊後は、1929年より国後島の植内小学校の代用教員を務め、代々別小学校、植沖小学校では校長を務めた後、1941年に国後島をさり、標津で豊岡国民学校、茶志骨小学校、俵橋小学校、武佐中学校などで校長を務め、1967年から1976年までは中標津町立図書館長を務めた[15]。

簗田三郎（簗田北嶺、簗田晩秋水）は歯舞諸島志発（しぽつ）島の志発東前国民学校の校長時に召集を受けており、誌上では国後島での生活、召集と除隊時の回想、戦後の別海町の文芸サークルの状況、野付半島突端ノテトにある先人の墓についてなどNo. 9を除くすべての号に作品を寄せている。簗田は、1910年青森県生まれで1927年から青森県三戸郡で小学校の準訓導として勤務し、1932年から国後島の国後尋常高等小学校の準訓導、翌年から羅臼尋常高等小学校、別海上風連尋常小学校をへて、1940年に別海高丘小学校で訓導兼校長を務めた。1944年に歯舞志発東前国民学校の校長となり、戦後は1971年まで根室や別海で小中学校の校長を務めた。簗田の「回想その2」では、港が

13）吉村良一「北のふるさと」『北のふるさと』No. 3、1977年、50-52頁、50-51頁。現在では歯舞「群」島と表記されるが、当時の空間認識にも関わるため本稿では歯舞「諸」島のまま表記する。

14）田村久之助「行軍」『北のふるさと』No. 1、1975年、41-43頁、43頁。No. 2からNo. 3まで旭川の兵営での生活をつづっている田村伝八郎（No. 4は伝三郎）は、1926年に根室で招集され1928年に旭川の歩兵連隊を除隊しており同一人物だと思われる。

15）田村久之助「島の教育12年の足跡」、千島教育回想録刊行会編『千島教育回想録』千島教育回想録刊行会、1977年、217-236頁、217頁。

氷結し孤島となった冬の国後島でスキー講習を行った様子が描かれている。老人も子供も自己流ですべっているため止まり方がわからず、当時国後島の古丹消（こたんけし）に移住していた日本近代スキーの草分けである猪谷六合雄が講習会を開き、実技指導と講演に加え手編み靴下のつくり方などを教えたとある[16]。簗田による歯舞諸島志発島での学校生活の記録では、コンブ漁が盛んだった村では大正期にかけて移住者が増加し、簗田が赴任した時期には100戸500人ほどが居住していた様子が記されている。教員がいないため簗田の他は教員経験のある兵隊2名が兵営から学校に通い教鞭をとっていた。毎年11月までの繁忙期を過ぎると冬期はさしたる仕事もなく、4月ごろまで気楽な生活はつづき、「長年住み着いた人たちは、この気楽な島の生活は、忘れられないものであったろう。島は天国であり、楽園「デカンショウ」の唄のような生活であった」とノスタルジックに回想している[17]。

「北のふるさと」の会員のなかでこうした千島での生活経験をもつ最も著名な人物は、村田吾一である。村田は、1905年に夕張の角田村（現在の栗山町）で生まれ、1921年に鳥取県倉吉農学校に入学、1924年に北海道空知教員養成所を卒業、実業補習学校の教員をつとめた。1928年から1941年まで13年間を国後島で教員を務め、古釜布（ふるかまっぷ）尋常高等学校訓導、植内（うえんない）尋常小学校校長、乳呑路（ちのみのち）尋常高等小学校校長などを歴任した[18]。国後島をさったのちに羅臼国民学校の校長を務め、1944年に海軍に入隊、戦後は第一回選挙で当選し1947年から1955年にかけて羅臼村長を務め、その後は町史編纂や公民館長に従事し北方領土返還運動にも精力的にかかわった。千島で教育経験をもつ教員たちの回想をあつめた『千島教育回想録』が発刊された際には、村田が刊行会長を務めた。植物採集を趣味としており、国後島で京都大学農学部の大井次三郎が調査した際に案内を務め「ひかりごけ」を発見、自身も国後島で植物標本の採集を行い、現在は羅臼町郷土資料館に標本が展示されている。羅臼校長時代に、満潮時に通学路がなくなると訴えた生徒たちに同行した際、マッカウス洞窟にて「ひかりごけ」を発見し、のちに観光地となった。また知床を題材に文学作品をかいた戸川幸夫との親交や、戸川の『オホーツク老人』の映画化『地の涯に生きるもの』の主演であり満州からの引揚げ者である森繁久彌との親交が知られている[19]。加藤登紀子の歌で流行した「知床旅情」は、映画『地の涯に生きるもの』のロケの際に森繁が映画用に作曲していた「オホーツクの舟歌」を、羅臼の住民のまえで「さらば羅臼よ」として披露したものである。

『北のふるさと』誌上では、「銭の記（2）」[20]で日本人が近年エコノミックアニマルと言われるようになったことをひきながら、「最近北方領土問題で、領土返還、漁業、友好の三点がからみ合っての論争がある。①一図に島をかえせ、その裏に友好、②島よりも魚だ（ママ）……金だ、③友好は（ママ）……魚を（ママ）……その次に島を。国境線の問題であるが、今少し奥深く考えて見ねばならない。日本人は決してゼニ動物ではない（ママ）……と言うことである」と、少し距離をとりながら「領土問題」を見る姿勢がある。

16）簗田晩秋水「回想―その2」、『北のふるさと』No. 8、1982年、11-13頁、13頁。
17）簗田三郎「志発東前校の教育」千島教育回想録刊行会編『千島教育回想録』千島教育回想録刊行会、1977年、104-116頁、104頁。
18）村田吾一「発刊のことば」千島教育回想録刊行会編『千島教育回想録』千島教育回想録刊行会、1977年、頁なし。
19）村田吾一『雲流るる国後』根室春秋社、1970年。
20）村田吾一「銭の記（2）」『北のふるさと』No. 9、1983年、70-76頁、76頁。

誌上に投稿された作品の多くは羅臼や国後島の気候や昆布、植物、とりわけ「ひかりごけ」がテーマである。「自然界でも、青い海にチラホラと流れ来る白い散流氷の美はまことに美しく夢の様でもあり、又別に海を被うて殺到する大流氷群の白原もよく、浅い春磯に残る山の様な流氷の、その底根の軽い香ぐわしいようなうす緑色、それはすばらしい色彩である。氷が解けて構成する造形美と共に私の愛して止まない美観である」[21] として、戸川幸夫や森繁久彌、幸田文を魅了した流氷の美しさをほめたたえる一方で、ひとたび海が大荒れになると磯の昆布が氷塊に削りとられ何十億の羅臼昆布が持ち去られるという「大暴力」が潜んでいるとする。知床岬の観光名所であった風船岩は 1973 年の流氷で押し倒され消失し、羅臼の浜にあった番屋が流氷に押しつぶされた話には事欠かない。流氷の下には氷と一緒に流れてくる氷下魚があり、氷が解けた塩分の薄い水は海底におりプランクトンを大量に発生させ、海を豊かにもする。「美しい流氷、生産のある流氷、暴力悪行の流氷。吾々人間がどうもがこうとも、どう評価しようとも、防ぎようのないのが流氷と氷山である」として「自然」に対する向き合い方を提示している。村田が村長をつとめた戦後においても、冬期の羅臼は陸路が雪で閉ざされ、流氷が打ち寄せる海をつたって国後島を横目に根室まで出ており、海は境界を分け隔てるものではなくむしろ人間の住処をつなぐ道として見られていた。これは国際運輸に関わり誌上に終戦前後の山東省の様子をかく中村自助が「普蘭天航路」にてどこでも駆け回る海の便利屋の「海のジプシー」と自称することにも相通じる[22]。

本節では、「北のふるさと」会員のうち千島に関係した作品をとりあげた。田村久之助が国後島を回想し「望郷やるせない」といい、簗田三郎が歯舞諸島志発島の暮らしを「島は天国であり、楽園「デカンショウ」の唄のような生活」と思い返すとき、島での生徒たちとの関係性やそれぞれの引揚げ経験を引き受けたうえで、島での過去をノスタルジックに想起している。村田の場合は、国後島で見た「ひかりごけ」を羅臼の洞窟で見つけ、羅臼昆布が国後島の西海岸でもとれ非常に品質が良いと漁師に教えられ、そして羅臼の町をとざす流氷の美しさを語るときに、境界によって分け隔てられた「領土問題」としてではなく海によってつながる文化圏の様な視点が浮かび上がってくる。「光苔不気味に光りて暗き窟えぞの昔を語り明かさん」[23] と、村田が「ひかりごけ」を題材に短歌を読むときに人類の歴史によって分け隔てられた海を異なる時間軸から見返すように受け取ることができる。

4.「ふるさと」を掘る―戦後の文芸運動と郷土史の掘り起こし

本稿の冒頭でも述べたように、北海道の地域文芸サークルの特徴として生活記録や創作に加えて郷土史の掘り返しが積極的に行われる場でもあった。「ふるさと」の意味を探るには、内地や外地からこの地域に来た人々のさまざまな来歴と、地域の歴史を接続し、人と地域の関係を取り結ぶ必要がある。『北のふるさと』誌上では、道東地域の文芸サークルの黎明期について記録が残されている。

21）村田吾一「知床の住人」『北のふるさと』No. 3、1977 年、10-11 頁、10 頁。
22）中村自助「普蘭天航路」『北のふるさと』No. 1、1975 年、21-23 頁、21 頁。
23）村田吾一「短歌―白鳥わたる・ひかりごけ」『北のふるさと』No. 7、1982 年、13 頁。

簗田北嶺（簗田三郎）「別海文芸のあちこち」では、香川県ほどの広さがある別海町の戦後の文芸活動の発祥地として3つの動向が注目されている[24]。第一は1956年から58年ごろに入植した人々のなかから木下拓灯と金塚庄栄によって『熊笹』が創刊され近隣の中学校の教員の助力を得ながらNo. 5まで続いたものの、メンバーの転任により消滅した。金塚は、十勝の実習所をへて別海町の根釧パイロットファームに入植しヤマギシ会の共同経営に参画、1976年に和歌山に転任するまで俳句短歌の指導で名を残した。第二は中西別俳句満月会で、中西別市街南方に入植し『熊笹』会員の俳句の師匠でもあった桧山向華が1947年中秋の満月の日に結成した。簗田をはじめ初心者7名が入会し、月一回のペースで集会を開き2000年代以降まで存続していた。第三は、尾岱沼白鳥会で1947年に短歌白鳥会が誕生し、「北のふるさと」会員でもある大隅きのを師として、90年代まで存続していた。終戦までは別海だけでなく国後島や歯舞諸島で教鞭をとっていた簗田は、1952年から56年まで別海村の床丹校に勤務していたさい冬季漁閑期を利用して青年たちと床丹青年俳句会を結成し、月一回の会を開いた。1961年に中春別小中学校に赴任した際にも中春別俳句短歌会を結成している。また簗田三郎「別海文協」[25]では、1968年に創立された別海町文化協会の様々な文化事業の様子が残されている。1973年に文芸部員が『文芸別海』の創刊号を出し年1冊ペースで現在でも号を重ねている。1966年に別海村で結成された朝霧文学会も、休刊期をはさんで現在でも活動を続けている[26]。

隣接する中標津については、中標津町郷土研究会が中心になってひらいたシンポジウム「中標津文化ことはじめ」の記録が掲載されている[27]。「北のふるさと」代表の吉井宣が司会を務めた。中標津商工会専務の五十嵐勲から、中標津では1946年に北方評論社が設立され、雑誌『北方評論』を4号まで出したところで資金難となり廃刊、その後短歌や俳句を中心にした文芸誌『野火』や『サイロ』も発刊されたが短命に終わったと報告がある。また1936年に中標津に移住し木材業を営む市川堅一から、1947年に分村一周年を記念してタブロイド版の新聞『新根室』を週一回のペースで発行したが、編集長の早逝で廃刊になったと報告がある。また市川は1952年に全国的に有名になった武佐中学事件についても言及している[28]。このシンポジウムのなかで中標津町史編纂に向けた動きも出ているのが重要である。

こうした道東地域の文芸サークル活動の黎明期を受けて、『北のふるさと』はどのような位置にあったのか。発行元であるアート印刷株式会社の中居順悦はNo. 1に寄せた「地の果て」において、「私達のグループと季刊誌の名称が「北のふるさと」決定した時、閃光的に細谷源二の俳句が浮かんだ」と書いている[29]。細谷源二は、戦前のプロレタリア文学、労働者俳句運動の先駆者であり、

24）簗田北嶺「別海文芸のあちこち」『北のふるさと』No. 3、1977年、74-77頁、74-75頁。
25）簗田三郎「別海文協」『北のふるさと』No. 1、1975年、66-68頁、66頁。
26）番匠健一「入植と離散と文学サークル運動：境界地域としての北海道東部、玉井裕志と山田洋次の出会い」『立命館生存学研究』4、2020年、61-76頁。
27）吉井宣、五十嵐勲、市川堅一、小森亨、佐藤恒市、村上文作「中標津文化ことはじめ」『北のふるさと』No. 2、1976年、92-97頁。
28）この事件は当時武佐中学で「偏向教育」が行われているとして警察の介入があり、府警による教職員の退職決議や同盟休校などで大きな事件となった。武佐中学事件については、元釧路教育大の三宅信一による道東地域問題研究会編『武佐2002：武佐中学校事件50周年記念誌』道東地域問題研究会、2002年に詳しい。
29）中居順悦「地の果て」『北のふるさと』No. 1、1975年、44-45頁、44頁。

治安維持法による俳句弾圧によって2年半の投獄されていた。出獄後に、北海道に渡り入植したが失敗、砂川で旋盤工を務め、定年後に札幌に移住し『氷原帯』を創刊、北海タイムスや北海道新聞の俳句選者となった。細谷源二の俳句は「地の果てに　倖せありと来しが雪」であるが、道東における文化サークル活動の困難さを細谷の北海道経験と結びつけている。

本節の冒頭で道東の地域文芸サークル活動は郷土史の堀り起こしと軌を一にしていると述べたが、No. 1の冒頭の特集は「計根別飛行場の断面をかたる集い」の記録である。この集会は1975年9月28日に中標津町計根別の母と子の家で開催され、記録はなかしべつ町郷土研究会編『草に埋もれた飛行場―郷土を語る集い「計根別飛行場の断面」集録』として刊行された[30]。計根別飛行場は、現在の中標津町と別海町に旧日本帝国陸軍が1941年から秘密裏に建設を行った4つの飛行場の総称である。集会では、当時基地建設に従事していた軍人による基地の規模や兵器についての回想や、強制立ち退きにあった入植者からも発言があった。計根別第4飛行場は、その後米軍に接収されたのち航空自衛隊へと引き継がれている。これらの飛行場群はソ連からの防衛に備え建設が急がれたが、労働力として学徒勤労動員、徴用、防衛招集など全国から集められ、強制連行によりタコ部屋労働を強いられた中国人、朝鮮人が3000人以上存在していた。鶴見俊輔は竹内好との対談で、引揚げ問題を議論するためには「自分が足をつけている場所と逆のところに足をつけて立っている人」がいて、その人の体験とともに自分の体験をみる必要があると述べ、地球のまったく反対側をあらわすルネサンス期の地理学用語「アンチポディース（対蹠地点）」という概念を紹介するなかで、引揚げと強制連行を重ねて議論する必要性を指摘している[31]。千島からの引揚げ経験者が多く、帰ることができない島への望郷の念がときおり顔を出す「北のふるさと」グループにおいて、計根別飛行場に強制連行された中国人、朝鮮人たちは、鶴見が言う「逆のところに足をつけて立っている人」ではなかったのだろうか。

もう一点、郷土史の掘り起こしで欠かせないのがアイヌからの視点である。アイヌ史において道東は大きな欠落であり、ほとんどが考古学、近世史の領域とされる。『北のふるさと』では、生きたアイヌの記憶として、鈴木泰三が「思い出につながるもの」で「大正初期の頃幸太郎という酋長が計根別、養老牛、標津方面を統括していたという事は、計根別の宿屋のお婆ちゃんからも聞いたし、西村さんの著書にも明らかである。殊に養老牛では温泉をいくつか発見して、部下とともに静養した」[32]というエピソードを残している。また先に紹介した尾岱沼白鳥会の大隅きのは「酋長のはなし」のなかで、明治末期に漁場の親方をしていた自身の家で会ったアイヌの熊撃ち名人榛（はしばみ）幸太郎を想起している。大隅の回想には「例年小沢牧場をはじめ馬持ち連がシュワンからアイヌの酋長を呼んで熊退治をすることになっていました。酋長の榛幸太郎は熊撃ちの名人で、前太郎との三人が着くとみんなで手を打って安堵したように喜んだものです。酋長は唇の廻りだけ残し、長い髪が顔いっぱいに生え眼が鋭く光って見えるが、丸顔で優しく、前太郎も髪も短くこれまた優しく、心やすい人たちは「チャチャ」と呼んでいました。酋長の耳輪は大きく、めり込んでゆらゆら光って、その乗馬ズボン姿は堂々たるものでした。兄弟は、忽ち大熊を撃ち止めて大手柄を見せ

30）なかしべつ町郷土研究会編『草に埋もれた飛行場――郷土を語る集い「計根別飛行場の断面」集録』なかしべつ町郷土研究会、1975年。
31）竹内好、鶴見俊輔「＜対談＞本当の被害者は誰なのか」『潮』142、90-102頁、1971年。
32）鈴木泰三「思い出につながるもの」『北のふるさと』No. 2、1976年、90-91頁、91頁。

ました。熊と取り組む幸太郎は、（熊と――引用者）話が出来るんだと噂する人さえあった」と書き記している[33]。

大隅や鈴木が見聞きした榛幸太郎については、『北のふるさと』No. 1 から No. 10 にかけて連載された吉澤虎三（虎沢吉）による創作「シワンプトの人々」がある。吉澤は 1914 年に北海道常呂郡野付牛町生まれで、1933 年に旭川の北海道第三師範学校を卒業した。計根別尋常小学校の訓導を務め、以降は根室管内の小中学校の校長を歴任した。1953 年の羅臼中学校校長時代に、羅臼を取材にきた武田泰淳を「ひかりごけ」の洞窟まで案内し、その時の様子は『ひかりごけ』作中に描かれている[34]。先の『草に埋もれた飛行場』刊行時には、なかしべつ郷土研究会の代表であり、1977 年中標津町公民館長時代に町史編纂事務局長を委嘱されたが健康上の理由で退職し、1980 年からは「北のふるさと」の代表を務めた。「シワンプトの人々」は、吉澤虎三の子息・吉澤紘により 2013 年に私家版として刊行された[35]。

「シワンプトの人々」は、標茶町虹別に実在したアイヌコタンをモデルにした物語である。先の大隅や鈴木の回想に出た榛幸太郎の祖父にあたり、シワンプトにコタンをひらいたコモニタラが主人公である。吉澤による物語のなかでは、伊能忠敬が蝦夷地測量の際に有珠で榛一族に会い、「住みよい理想の地を求めて」東に向かう彼らと行動をともにし、エリモ（襟裳）岬をへてアッケシ（厚岸）に入り、国後島を横目にヘッカイ（別海）にいたる。伊能忠敬は厚岸の国泰寺から江戸にもどり、ニタラは西別川をさかのぼり水の湧き出す水源にシワンプト・コタンをひらく。ニタラはカムイヌプリにのぼりカムイトー（摩周湖）をながめ噴火口へと降りる。ヌプリの神に感謝の報告とシワンプト・コタンの平安と加護を祈って、神の洞の森をさる。チカリペ（野草料理）やアイヌの生活文化についての豊かな記述があり、熊取の準備がすすむ。南蝦夷からニタラを継ぐ鼻オト、そして磯平もナツもキヤなど仲間がやってくる。物語の終盤、ニタラは仲間と車座になってなぜ気候の良い有珠のコタンを出たのか話をする。人々の抗争が激しくなり小さなコタンには滅亡の運命がせまるなか、広い大地のどこかにある争いのない理想の土地を目指すためこの地にきた。有珠から仲間を引き連れてきた鼻オトが次のコタン・コロクルにきまり、磯平がオンネチェプ・カムイ（巨大なイトウ、魚の神）をコタンに持ち帰り、新しいチセを共同作業でつくりあげチセの神を迎える芦刈りの歌の場面で物語は終わる[36]。

『北のふるさと』誌上の座談会で、吉澤は「シワンプトの人々」をフィクションとしているが、シワンプト・コタンの周辺について関係者に聞き取りを行っていた。吉澤虎三の妻・吉澤シマの両親にあたる吉澤幸一郎・フヨは標茶の知人を頼って 1919 年に北海道に渡り、別海村の本別孵化場に勤めた。摩周湖を水源に野付半島の北まで流れる西別川には、上流に北海道水産試験場西別鮭鱒孵化場があり、下流のシワンプト捕獲場で親魚を捕獲し採卵した卵を本別孵化場などに収容していた。鱒は 6 月から鮭は 9 月から翌年 1 月まで捕獲が行われ、近くのシワンプト・コタンのアイヌ

33）大隅きの「酋長のはなし」『北のふるさと』No. 4、1979 年、77-80 頁、78-79 頁。
34）武田泰淳『ひかりごけ』新潮文庫、1992 年、168-178 頁；伊藤博子「ひかりごけ論――武田泰淳の意図をめぐって」『国文研究』25、熊本女子大学国文談話会、1979 年、36-43 頁。
35）虎沢吉『シワンプトの人々』私家版、2013 年。
36）虎沢吉「シワンプトの人々（1）-（10）」、『北のふるさと』Nos. 1-10、1975-1984 年。

の大人・子どもが雇われ、捕獲や運搬に従事した[37]。また『北のふるさと』No. 6には、(1) から (6) までは「シワンプト・コタンの創成期の1800年半ばの話であり1900年代に入ると、彼等のコタンは20数戸の大集団となり、ニタラもツタラもいなく、孫もコタラの時代に入ってくる。コタン創成の最初にニタラが発見した、神の泉（西別川の水源）に鮭鱒の孵化場ができ、和人も来て、彼等の生活もすっかり変わってくる」[38] と脚注がつけられている。『北のふるさと』誌上には、標津川の両岸から密漁が横行し、筋子だけを抜き取り巨大な鮭が打ち捨てられて雪に埋もれる様子も描かれている[39]。本稿では吉澤の作品自体への分析を行うことはできないが、郷土史家である吉澤が自身が直接知ることがない時代のアイヌの物語を「創作」として書かなければならなかった姿勢が重要である。

本節では『北のふるさと』誌上の作品から中標津と別海の文芸サークル運動の黎明期について概観した。その際、道東における地域文芸サークルの展開は、郷土史の掘り起こしと密接にかかわっている点を強調した。『北のふるさと』の会員たちは、短歌や俳句などの同人サークルにも関わりつつ、郷土研究会のなかでも重要な位置をしめ、計根別（けいねべつ）飛行場を語る集会や地域文化にかかわるシンポジウムなどの場をつくっている。千島での生活経験者が会員に多い『北のふるさと』誌上で、強制連行による中国人、朝鮮人の歴史の掘り起こし集会の記録掲載は、まったく別の立場から「強制移動」や「境界」「故郷」について考える機会を提供している。また郷土史を掘り起こす際、和人の入植がすすみ定着にいたる開拓史観をなぞるだけではなく、アイヌ側からの視点をどう入れていくのかが課題であり、郷土史家の吉澤虎三は自身の家族史にも関わるシワンプト・コタンをテーマに「創作」として物語をつくることによって応えた。

5.「ふるさと」を語る行為

『北のふるさと』という雑誌名が示す通り誌面では私にとってのふるさととは何かをテーマにする作品が多い。2節で触れた千島での生活経験者にとって、国後島や択捉島、歯舞諸島の志発島は帰りたい「故郷」と呼べる場所だったかもしれない。誌上には、「望郷」という言葉ではひとくくりにできない様々な「故郷」の語りがある。標津町の役場で長年教育長の任についた柳沢巽の「私の「ふるさと」」では、伊茶仁カリカリウス遺跡の保存と史跡公園化に取り組むなかで「ふるさと運動」を提唱し、「私のふるさとを自分自ら見直している最中」としている[40]。地方文化の時代に、自身の住む空間を「ふるさと」として改めて見直す行為はしばしばみられる。また別海町の教育委員をつとめる斉藤直道「回遊魚からの脱却」では、産卵や育成、索餌、季節など様々な魚の回遊パターンを参照しながら、現代社会における人間の回遊現象と脱都会化の流れに共通性を求めている[41]。

37）吉澤紘「物語「シワンプトの人々」を本にする」『中標津文芸』29、2013年、47-67頁、59-60頁。
38）虎沢吉「シワンプトの人々 (6)」『北のふるさと』No. 6、1981年、94-97頁、97頁。
39）柿原林平「密漁銀座街」『北のふるさと』No. 2、1976年、10-11頁。
40）柳沢巽「私の「ふるさと」」『北のふるさと』No. 5、1980年、20-23頁、23頁。
41）斉藤直道「回遊魚からの脱却」『北のふるさと』No. 8、1982年、43-47頁、47頁。擦文時代を中心とするこの遺跡は、現在ポー川史跡自然公園として整備されている。柳沢氏の取り組みについては、吉井宣則編『柳澤巽遺稿集「ポー川のほとりで」』柳沢巽遺稿集刊行会、1988年を参照。

魚類が安定した生息域を探るように、人間も全知全能をしぼって「安住すべき郷土」を認識することが大事だとのべ、都会から「故郷」に戻った教え子を前に「回遊最後の地として、川をさかのぼった鮭や鱒が役割を完全に果たしてその命を終るように、この地に全力を傾注」することを願っている。郷土づくりや地方文化の創造は地域社会の再生産のために重要なものであるが、『北のふるさと』誌上では現在の居住地＝「ふるさと」という枠組みではひとくくりにできない、「故郷」への複雑な感情が吐露されている。

大沼和子は、中国の揚子江で生まれ、6歳まではハルピンの祖父母の家で育った。祖父は満州で警察官をつとめ、父が満鉄社員だった。1945年8月15日を境に生活ががらりと変わり、家の中のものはすべてなくなった。引揚げ時の回想では、「私達は貨物船に乗って、私の生まれ故郷の大地から離れた。今、こうして思い起こしてみるとき、私の故郷は、ただ空しく、胸の奥からつき上がってくるような熱いものを感じさせてもくれない、わけのわからない不安と恐ろしさが、残っていて、単なる情景だけがまぶたの裏に焼きついているに過ぎない。…。結局、私にとって本当のふるさとは、この中標津以外にはない」[42] とあるように、行きついた中標津を「ふるさと」とする以外に選択の余地のない生まれ故郷からの「拒絶」がある。

同じ号に作品を投稿している三浦二郎は1923年に朝鮮の京城生まれ。1939年、京城師範学校普通科在学中に日本野鳥の会に入会した。京城郊外の泰陵の日本人学校勤務時に召集を受け大田で入営した。終戦後は、11月に従兄の住む北海道札幌市に復員した。1946年に空知管内万字炭鉱で教員となり、その後1957年に厚岸小学校、1964年には阿寒の下仁々志別（しもにししべつ）小中学校の校長を務めた後、1966年からは上風連中学校、光進小中学校、野付中学校、計根別中学校、養老牛小中学校など別海町と中標津町内の学校で校長を務めた。1973年に根室自然保護教育研究会（根室自然教育研究会）を発足させ会長に就任、自然教育について多くの研究を残し道東の自然保護の基礎を築いたとされる。定年後は苫小牧へ移住し、『雅路庵通信』を発行し、日本野鳥の会理事となった[43]。

三浦二郎「渡り鳥人生」では、朝鮮師範学校時代に内地の文献に出てこない鳥の生態に「面白味」があり、ある種の鳥の生態をもう少しで明らかにできるという時に、終戦引揚げとなって「口惜しい」と述べている。面白味のある鳥を求めて道東への転勤を果たした現在について、「今、尾岱沼にいて、夏は夏の鳥、冬は冬の鳥が渡って来るし、春と秋にはこれまでまた多くの種類の鳥が通過するのを観察していると、この鳥達にはそれぞれそれなりに帰る故郷があって季節による移動をしているのだが、私のように帰りたくとも、生まれ故郷は既に外国になってしまい、だんだん日本の東へと移動した者は、渡り鳥の一種ではあっても飛んで行った先々で餌をついばむより他ない、そしてそこで力尽きて死んで行く迷鳥の部類に属するでしょう」[44] と、「故郷」が「故郷」でなくなってしまった引揚げ者としての自身を、渡りの途中で迷ってしまい仲間と故郷に帰ることができない「迷鳥」に例えている。

また誌上には、戦災によって道東の地にたどり着いた人の体験記も掲載されている。中標津の農

42）大沼和子「私のふるさと」『北のふるさと』No. 2、1976年、56-59頁、59頁。
43）藤井薫「『野付と三浦先生』①はじめに（三浦二郎アーカイブス）」別海町野付半島ネイチャーセンター、2020年7月、1-2頁、2頁。（https://notukehaido.amebaownd.com/posts/9401682?categoryIds=3368119）（最終閲覧日：2022年11月30日）
44）三浦二郎「渡り鳥人生」『北のふるさと』No. 2、1976年、12-13頁、13頁。

業協同組合の職員であった入倉英夫は、アメリカ軍の根室空襲を予想して、母方の叔父が飛行場建設の請負師をやっている中標津へと疎開した。入倉の父は病のため択捉島で現地除隊、祖父は、1898年に新潟から姉の嫁ぐ根室にわたり日露戦争で功績をたてたが、根室空襲によって焼け出され馬車で標津まで移動し65歳からあらたな土地を耕した。「自然の無限さ、それらに立ち向かい、生存していく人間の能力の強さ、生命の尊さを、この祖父から私は教えられた」[45] とある。

鈴木参朗の「百姓ごっこ」は、1945年3月の名古屋空襲で焼きだされ妻の故郷の標津に逃れる途上、7月の根室空襲にも遭遇し、標津町茶志骨原野の既墾地を購入し1946年から1949年まで行った営農記録である。「天気さえよければ朝露が消えぬうちから額に汗して働き、誰れに束縛されることもない。一間柄の大鎌を振るっての牧草刈りや「にお積み」、畑仕事の合い間を地内の林に憩えば、そこには野鳥がさえずり、「フクロウ」が眠そうな眼をして楢の梢に止まっていたし、朽木の穴にチョロチョロ出入りする「シマリス」の可愛らしい姿も見られ、突然足許から「ユキウサギ」が飛び出して面食らうこともあった。夏の夜は野天風呂で満点の星を仰ぎながら、汗を洗い落として自由な一日を終わる。少しオーバーに表現するならば「大自然と共に毎日を生きる。こんな楽しい生活が現実にこの世にあったのであろうか」とさえ私は思った」とある。二度の空襲を生き延びた鈴木夫婦は、営農経験はなく換金作物の栽培を行うことができず生活がうまくいったわけではなかったが、道東の「大自然」のなかで新しい生活設計を喜びとともに始めている。しかし既墾地入植だったため農業団体からの支援金もなく、乳牛と交換した馬や毛皮のため飼ったアンゴラ兎の不運が続き、借金のため離農し名古屋にもどった。東北本線尻内駅で京都の施設を脱走した満州引揚げ者の孤児を引き取って育てたものの翌年入植地から失踪したエピソードも書かれており、この地にとどまることのできなかった離散の記録でもある[46]。根釧原野は大正期には関東大震災の罹災者を受け入れ、戦中戦後は内地の戦災者や引揚者が流入した場所でもあるが、道東の厳しい自然環境は、すべての人にとっての安住の地ではない。

6．おわりに

北海道東部の中標津町で1975年から1985年まで発行されていた地域文芸誌『北のふるさと』（Nos. 1-10）をとりあげ、「北のふるさと」会員の活動から地域に生きる人々の群像を明らかにした。文芸活動を通じて「ふるさとを再発見」し、「人間の生きている証」を確かめようという呼びかけには、和人による開拓と定着が近い過去にすすんだ地域特有のニュアンスが含まれている。2節でとりあげた北のふるさと誌上展では、『北のふるさと』誌上で特集された絵画・版画・写真などから自身が住む地域への視線において、「自然」への視線が人類史的な境界や領土とは異なるものの見方を提示している。3節では、『北のふるさと』誌上で特に国後島、歯舞諸島など千島での生活経験者の声を拾った。1970年代から80年代にかけて北方領土問題の枠組みが固定化される時期であるが、誌上では島の教員生活のノスタルジックな回想や望郷の念の発露があるものの、流氷やひかりごけなど自然の生態系が道東と千島をつなぐありようから地域と境界を考える視点が底流にあ

45）入倉英夫「樹教」『北のふるさと』No. 4、1979年、31-35頁、33頁。
46）鈴木参朗「百姓ごっこ」『北のふるさと』No. 6、1981年、55-58頁、57-58頁。

る。4節では、戦後の別海・中標津における文芸サークル運動の黎明期について概観し、道東の文芸サークル運動が郷土史の掘り起こしと共に進んでいったことを確認した。『北のふるさと』誌上は、戦争末期の陸軍計根別飛行場建設における中国人、朝鮮人の強制連行の掘り起こし集会の記録や、シワンプト・コタンの榛幸太郎一族をあつかった創作作品があり、千島からの引揚げ者の経験と強制連行によって道東に連れてこられた中国人、朝鮮人の経験を照らし合わせる、あるいはシワンプト・コタンのアイヌたちにとっての故郷とは何かを考える可能性の場でもあった。5節では、誌上で「ふるさと」を語る人々の言葉から、自身の住んでいる場所の再発見に向かう心性だけではなく、生まれ故郷からの拒絶や故郷に帰ることができない「迷い鳥」、あるいは戦災者たちが一度入植したものの安定した農業経営を行うことができず離散する経験などをみた。道東地域において、自分が現在住んでいる場所がそのまま「ふるさと」という考えを留保し、生まれ育った場所と現在の居住地で引き裂かれる自己や道東にとどまることができなかった離散者の経験、「故郷」「ふるさと」という力学のなかで排除される経験から地域の歴史を見ることが重要である。こうした作業の積み重ねのうえに、人類の歴史において境界線で分け隔てられた地域を、自然の生態系を含む境界を越えた目線で未来像を描いていくことにもつながるはずである。

謝辞

本稿で扱った『北のふるさと』は、管見の限り中標津図書館のみ所蔵がある貴重なサークル誌である。執筆にあたって別海町在住の元酪農家・小説家の玉井裕志さんより玉井裕志文学館に所蔵されていた本誌を快くお貸しいただいた。この場を借りて御礼申し上げます。

資料　『北のふるさと』目次一覧

No. 1	1975年11月	吉井宣	北のふるさと発刊によせて
		吉井宣	特集　計根別飛行場の断面
		鈴木泰三	武佐の正教会
		中村自助	普蘭天航路
		虎沢吉	シワンプトの人々
		吉井宣	紅外口害論
		本田克代	牛
		大隅きの	私の短歌の歩み
		田村久之助	行軍
		中居順悦	地の果て
		横内建夫	酒感主観
		浅間和夫	食味試験の演出
		大沼善弘	あれの手術
		黒田喜一	すばらしきかな原野
		村田吾一	失いたくない二つのもの
		簗田三郎	別海文協
		柿原林平	言葉迷々
		細見ひろし	表紙

		佐藤ひでお	グラビア写真
		細見ひろし・ あさだ正名	カット
No. 2	1976 年 5 月	宣・Y・吉	コラム
		小森亨	北のふるさと誌上展
		浅間和夫	イモはイモでも
		中居順悦	風雪に耐ゆ
		柿原林平	密漁銀座街
		三浦二郎	渡り鳥人生
		吉村良一	本とのつき合い
		中村自助	烟台の思い出
		田村伝八郎	夜尿症
		村田吾一	ふるさと文化をほりおこすものたち
		本田克代	べこっ子
		大隅きの	風
		乾太助	印半天
		中山博郎	ベストセラーを読む
		上村静子	幼ころを思う
		岩井誠子	詩　あつ子
		藤田サダ子	詩　わんぱくぼうず
		渡辺民江	詩　これから
		安江朝子	短歌
		大沼和子	私のふるさと
		吉井宣	グールズ君のたわごと
		簗田北嶺	追憶
		大沼善弘	小火（ぼや）
		虎沢吉	シワンプトの人々（2）
		大木フミエ	娘の卒業
		鈴木桂	再出発の日
		森田まさはる	雨が降ってほしい
		北環	詩　青春の譜
		鈴木泰三	思い出につながるもの
		シンポジウム	中標津文化ことはじめ
		細見浩	表紙絵・カット
			編集後記
No. 3	1977 年 10 月	中吉功	北のふるさと誌上展
		浅間和夫	馬鈴しょの花
		中川元	イトウと泳ぐ鳥
		村田吾一	知床の住人
		安江朝子	短歌
		本田克代	俣落線

		堺万一郎	馬市
		吉井宣	わがふるさと中標津
		柿原林平	野良犬の悲恋
		鈴木泰三	祖父　六蔵
		大隅きの	子宝
		田村伝八郎	紀元節
		中村自助	日射病
		吉村良一	北のふるさと
		黒田喜一	すばらしきかな原野
		大沼善弘	国道 272 号線（上）
		三浦二郎	九州英彦山登山記
		虎沢吉	シワンプトの人々（3）
		簗田北嶺	別海町文芸のあちこち
		山本茂	笹の芽笛
			編集後記
		細見浩	表紙絵・カット
			名簿
No. 4	1979 年 2 月	清水克美	北のふるさと誌上展
		浅間和夫	伯爵・白爵
		三浦二郎	ベニワラ
		本田克代	笑い
		田村伝三郎	親不孝者
		太田亀次郎	北斗七星と私
		塩崎義郎	バンコクのティラ君
		黒田喜一	中標津パチンコ談義
		入倉英夫	樹教
		渡辺民江	短歌
		吉村良一	女鳥羽の里
		柿本良子	短歌
		村田吾一	病床回想記
		虎沢吉	シワンプトの人々（4）
		玉井裕志	大阪の娘たち
		いけのしげる	詩　ゆき
		吉井宣	うまとのつきあい
		いけのしげる	詩　繕う糸ありませんか
		簗田晩秋水	ノテト
		堺万一郎	今は昔、緬羊物語
		大沼善弘	国道 272 号線（中）
		木村千代子	短歌
		大隅きの	酋長のはなし
		鈴木泰三	タバコあれこれ

		中村自助	芝罘脱出
		粟野けい子	秋の深まり
			編集後記
		細見浩	表紙絵・カット
			名簿
No. 5	1980 年 10 月	浅間和夫	繁次郎とゴショイモ
		中居美沙夫	俳句　流砂
		本田克代	新聞
		玉井裕志	「芦刈」のことなど―読書へのめざめと K さん
		飛沢寿美枝	たべもののはなし
		渡辺民江	農家の花嫁
		林照子	川柳　女
		柳沢巽	私の「ふるさと」
		細見浩	システィナ礼拝堂
		三浦二郎	ネック・バンド
		大隅きの女	初恋―思い出の記―
		宮のぶなお	北のふるさと誌上展
		鈴木泰三	愚者曼荼羅
		土肥ヨシ子	詩　乱反射
		黒田喜一	巷のつぶやき
		簗田晩秋水	無蓋列車の旅
		太田亀次郎	和ちゃんと皆勤賞
		吉村良一	春
		村田吾一	お忍び
		入倉英夫	祖父の日露戦争従軍手帳から
		粟野けい子	万引
		虎沢吉	シワンプトの人々（5）
		大沼善弘	国道 272 号線（下）
			編集後記
			名簿
			原稿募集
No. 6	1981 年 3 月	浅間和夫	バレイショ栽培の発祥
		戸田峯雄	定説
		粟野けい子	岬文学展へ
		中山博郎	狩勝 53 号―ある夜ばなし―
		本田克代	アットリ
		玉井裕志	敗戦と教育―丹葉節郎先生との出会い―
		柳沢巽	“根室の血”と標津の素顔の中から
		政野詩州	川柳　雪おんな
		三浦二郎	復刻本
		山野寿美枝	私と子供のなかしべつ

		渡辺民江	雑記帳の中から
			座談会　私にとってのふるさと
		鈴木参朗	百姓ごっこ
		吉村良一	安長さん
		村田吾一	山草拾いあるき―昭和54年憶い出し記―
		黒田喜一	勝ちの視点―パチンコ再談義―
		斉藤直道	詭弁の時代
		だけかんば俳句会	俳句（1）
		鈴木泰三	食虫植物（1）
		大隅きの女	嘘と実―切れ切れのはなし―
		倉入笑	ちょっときいて
		加藤公夫	川底をはうヤツメウナギ
		だけかんば俳句会	俳句（2）
		簗田晩秋水	霊感修行
		土肥ヨシ子	詩　こころのいとを
		虎沢吉	シワンプトの人々（6）
		池野しげる	詩　開墾（1）―笹と男―
		大沼善弘	高潮（1）
			あとがき
			会員住所録
			標津遺跡群　伊茶仁カリカリウス遺跡
			原稿募集
No. 7	1982年2月	岩田宏一	北のふるさと誌上展
		吉村良一	「駅逓所」展望
		本田克代	白鳥
		坂脇安雄	原野二題
		村田吾一	短歌―白鳥わたる・ひかりごけ―
		三浦二郎	勅令278号
		渡辺民江	雑記帳の中から
		柳沢巽	人情の旅＝四題
		大隅きの	母を語る
		黒田喜一	巷のつぶやき（2）
		粟野けい子	七宝焼教室
		鈴木泰三	食虫植物（2）
		村田吾一	羅臼昆布のある海
		だけかんば俳句会	俳句（1）
		簗田晩秋水	回想（その1）
		吉村良一	写真集「別海」
		虎沢吉	シワンプトの人々（7）
		大沼善弘	高潮（2）
		土肥よし子	詩　はたちの旅愁

		玉井裕志	「ひかりごけ」の校長先生
		加藤公夫	魚釣り転じて知人宅へ
		今西青峰	句集出版のこと
			あとがき
			会員住所録
			標津遺跡群―伊茶仁カリカリウス遺跡―
			原稿募集
		細見浩	表紙画（当幌駅）
		細見圭子	本文カット
No. 8	1982 年 8 月	細見浩	北のふるさと誌上展
		柳沢巽	北方圏国際会議から
		簗田晩秋水	回想―その 2―
		吉村良一	四号道路異聞
		今西正視	伐らずの木
		三浦二郎	山の貌―その 1―
		大木敏道	森林が人類をつくった
		黒田喜一	巷のつぶやき（3）―思いつき家庭教育―
		大隅きの女	ふるさとの人間関係
		村田吾一	銭の記（1）
		斉藤直道	回遊魚からの脱脚
		だけかんば俳句会	俳句
		鈴木泰三	食虫植物（3）
		大畑美穂子	詩　母の日
		佐々木光雄	笑いと波
		松実満須子	川柳　風のうた
		土肥よし子	詩　女たちの感性よ
		虎沢吉	シワンプトの人々（8）
		太田亀次郎	残る灯は消さないで（1）
		粟野けい子	善一の向学心
		加藤公夫	はらいた
		大沼善弘	高潮（3）
		池野しげる	男一匹　又左ェ門
		細見浩	北のふるさと誌上展に寄せて
			編集後記
			会員住所録
			標津遺跡群―伊茶仁カリカリウス遺跡―
			原稿募集
		細見浩	表紙画（野付半島トドワラ）
		細見圭子	本文カット
No. 9	1983 年 6 月	小森サダ	北のふるさと誌上展
		柳沢巽	人との出会い―去年と今年―

		本田克代	中標津空港
		加藤公夫	一枚のスクラップと写真仲間
		三浦二郎	山の貌―その 2―
		坂脇安雄	カラスの子育て
		佐々木光雄	夕立
		だけかんば俳句会	俳句
		大木敏道	ある沖縄ノート
		今西正視	戦時下
		桐藤駿	被爆者 T さんの死
		だけかんば俳句会	俳句
		大隅きの女	ある男性の生い立ち
		どいよしこ	詩　冬の夜明けに
		大畑美穂子	詩　いまは
		渡辺民江	雑記帳の中から
		黒田喜一	科学試行―パチンコ点検―
		村田吾一	銭の記（2）
		斎藤直道	益者三友
		太田亀次郎	残る灯は消さないで（2）
		矢吹弘照	馘首
		粟野けい子	善一の向学心
		鈴木泰三	食虫植物（4）
		虎沢吉	シワンプトの人々（9）
			編集後記
			会員住所録
			標津遺跡群―伊茶仁カリカリウス遺跡―
			原稿募集
		細見浩	表紙画
		細見圭子	本文カット
No. 10	1984 年 11 月		北のふるさと誌上展
		柳沢巽	北海道の文化に思う
			―一村一品運動とカルチャー観光を通して―
		本田克代	鈴木平八さーん
		浅間和夫	ある小さな関心事
		大木敏道	歴史―この面倒なるもの
		今西正視	雀の子受難
		標津川柳社	川柳
		簗田晩秋水	山形県の一駒
		田村君江	父
		三浦二郎	山の貌―その 3―
		吉村良一	野付半島
		鈴木泰三	野付に墓を訪ねて

		加藤公夫	私たちの結婚祝賀会
		矢吹弘照	塞翁が馬
		黒田喜一	巷のつぶやき（4）―拾ったり見つけたり―
		村田吾一	妖光のヒカリゴケ
		志賀謙治	鯨が会議を呑みこむ！
			座談会
		堺萬一郎	小屋の中で
		標津川柳社	川柳
		斉藤直道	草原に輝き放つ光あり
		桐藤駿	被爆者Ｔさんの死（2）
		太田亀次郎	はじめての北海道へ
		神代愛彦	「小品」三平の一日
		遠藤隆子	詩　桜・コスモス
		どいよし子	詩　夏の夜
		いさり火吟社・だけかんば俳句会	俳句
		中山博郎	水洗トイレの反美学
		大隅きの女	思い出すままに
		坂脇安雄	根室原野の怪談
		粟野けい子	春は北のふるさとめぐり
		虎沢吉	シワンプトの人々（10）
		大沼善弘	はしゃぎ
			四町の広告
			編集後記
			会員住所録
			標津遺跡群―伊茶仁カリカリウス遺跡―
			原稿募集
		細見浩	表紙画
		細見圭子	本文カット

作成：番匠

（広島国際学院大学准教授）